

蘇轍による蘇軾「和陶詩」の繼承

原 田 愛

北宋の文人蘇軾（字は子瞻）は、晩年に嶺南に流謫され、そこで陶淵明の詩に和韻する「和陶詩」百二十四首を完成させた。その端緒である「和陶飲酒二十首」において、彼は次のように序している。

吾飲酒至少、常以把盞爲樂、往往頽然坐睡。人見其醉、而吾中了然。蓋莫能名其爲醉爲醒也。在揚州時、飲酒過午輒罷、客去解衣磐薄。終日歡不足而適有餘。因和陶淵明飲酒二十首。庶幾以髣髴其不可名者、示舍弟子由・晁无咎學士。

吾酒を飲むこと至^{いた}って少なきも、常に盞を把るを以て樂しみて爲し、往往にして頽然として坐睡す。人其の醉ふを見れども、吾が中了然たり。蓋し能く其の醉ふと爲し醒むると爲すを名づくる莫し。揚州に在りし時、酒を飲みて午を過ぐれば輒ち罷め、客去るに衣を解きて磐薄す。終日歡は足らざるも適は餘り有り。因りて陶淵明の「飲酒二十首」に和す。庶幾はくは髣髴として其の名づくべからざる者を以て、舍弟子由・晁无咎學士に示さん。

蘇軾「和陶飲酒二十首引」（『和陶詩集』卷一）
即ち、蘇軾は、酒量は多くないものの、平素友人との酒宴を好み、飲酒において「醉」と「醒」が交錯する境地を樂しんだ。知揚州として

赴任した元祐七年（一〇九二）五月、飲酒を樂しんだ際に、陶淵明の「飲酒二十首」に和韻することで、その「名づくべからざる」ほろ酔いの境地を、三歳下の實弟蘇轍（字は子由）と、當時揚州通判であった門人晁補之（字は無咎）に示したのである。蘇轍と晁補之はこれに續いて和韻し、その四年後の紹聖三年（一〇九六）には、張耒（字は文潛）もこのうちの十九首に繼和したという。蘇轍は、蘇軾にとつて生涯最大の理解者であり、晁補之・張耒は、蘇軾・蘇轍を師とする蘇門の中でも、蘇門四學士として稱揚された人物であった。このように、蘇軾が最初の和陶詩において重視したのは、陶淵明詩に託した己の心情を、同志と共有することであった。

蘇轍は、蘇軾から以後も和陶詩の繼和を求められ、計五十二首の和陶詩を詠んだ。現存する南宋黃州刊本『東坡先生和陶淵明詩』全四卷には、陶淵明の原詩と蘇軾の和陶詩に續いて、蘇轍の和陶詩も併録されている。和陶詩に表れる蘇軾の「澄明な心情」は絶賛され、多くの先行研究も存在する。しかし、その心情を最も理解したであろう蘇轍については、未だ十分な論究が行われていない。本稿では、和陶詩の制作と傳承において蘇轍が果たした役割を考察し、和陶詩の後世への

繼承における重要な一面を明らかにしたい。

一、和陶詩の成立過程

蘇軾が最初の和陶詩である「和陶飲酒二十首」を詠んだ元祐七年（一〇九二）は、舊法黨が政權を執つた所謂「元祐更化」の時期であり、蘇軾が生涯最高の官位に至つた年であつた。しかし、蘇軾の「和陶飲酒二十首」の内容を見ていくと、彼が自分の將來に不安を感じていたことが読み取れる。陶淵明の「飲酒二十首」其五（結廬在人境）において、蘇軾は次のように和韻した。

小舟真一葉 小舟は真に一葉なり

下有暗浪喧 下に暗浪の喧しき有り

夜棹醉中發 夜に棹して醉中に發すれば

不知枕几偏 枕几の偏くを知らず

天明問前路 天明に前路を問へば

已度千重山 已に千重の山を度れり

嗟我亦何爲 嗟我亦た何をか爲さん

此道常往還 此の道常に往還す

未來寧早計 未來寧んぞ早に計らん

既往復何言 既往復た何をか言はん

このように、蘇軾は、これまでの人生を夜河の「暗浪」に浮沈する「一葉」の「小舟」に比喩した。「嗟我亦た何をか爲さん、此の道常に往還す」という「天明」後の自問からは、蘇軾の透徹した人生觀とともに、推測し難い「未來」への不安も窺える。飲酒してもその不安を完全に拂拭し得なかつた蘇軾は、心から飲酒を楽しんだ陶淵明のように隱遁することを志すに至る。そして、其十四（故人賞我趣）の

和韻において、蘇軾は蘇轍に隱遁を持ちかけた。

我家小馮君 我家の小馮君

天性頗淳至 天性頗る淳至たり

清坐不飲酒 清坐して酒を飲まず

而能容我醉 而れども能く我が酔ひを容る

歸休要相依 歸休は相依るを要むるも

謝病當以次 謝病は當に次を以てすべし

豈知山林士 豈に知らんや山林の士の

骯髒乃爾貴 骯髒として乃ち爾く貴きを

乞身當念早 身を乞ふるは當に早きを念ふべし

過是恐少味 過ぐれば是れ恐らく味はひ少なからん

蘇軾は、蘇轍の「淳至」な性質を稱え、酒に酔う蘇軾を快く受け入れる蘇轍の温順なる風貌を詠った。兄弟は、官界に入った當初から致仕後に共に歸隱することを望んでいたが、蘇軾は蘇轍に對して時機を逸せずに實行し、醉酒と隱遁の快い味わいを享受すべきであると諭したのであつた。

但し、元祐七年（一〇九二）當時の蘇軾には、これらの和陶詩を詠み進めて一書とするまでの意志はなく、平素の隱遁への思いを興に乗じて陶淵明「飲酒二十首」に託したに過ぎなかつた。しかし、翌元祐八年（一〇九三）九月、太皇太后高氏の崩御及び哲宗の親政を發端にして政局が急變し、それによつて再び政權を掌握した新法黨は、舊法黨に對する報復を開始した。舊法黨の中樞にいた蘇軾・蘇轍兄弟も處罰の對象となり、紹聖元年（一〇九四）、蘇軾は惠州（廣東省惠州市）に、蘇轍は筠州（江西省高安市）に左遷されたのである。この苦境に直面したことで、陶淵明への共感を一層強くした蘇軾は、「和陶飲酒

二十首」の制作から三年後にあたる紹聖二年（一〇九五）三月四日、第二の和陶詩である「和陶歸園田居六首」を詠んだ。その序文に「始余在廣陵、和淵明飲酒二十首、今復爲此。要當盡和其詩乃已耳（始め余廣陵に在りしとき、淵明の『飲酒二十首』に和し、今復た此を爲す。要當に盡く其の詩に和して乃ち已むべきのみ）」と述べるように、蘇軾は、この時に陶淵明詩の全てに唱和することを決意したのである。蘇軾は、この「和陶歸園田居六首」も門人釋道潛（號は參寥子）に寄せており、以後も和陶詩を門人や親族、配所の友人などに傳えた。そのように蘇軾が他者に贈與した和陶詩は、實に九十六首を數えることになった。

當時、筠州にいた蘇轍も、紹聖二年（一〇九五）秋に蘇軾から「和陶讀山海經十三首」を寄贈されており、そこで蘇軾の全陶淵明詩唱和の決意を知ったと思われる。更に、紹聖四年（一〇九七）、海南島に流謫された蘇軾は、同時期に雷州に遷った蘇轍に書簡を寄せ、『和陶詩集』序文の制作を求めた。その序文には、蘇軾の書簡がそのまま引用されている。

書來告曰、古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也。追和古人、則始於東坡。吾於詩人無所甚好、獨好淵明之詩。淵明作詩不多、然其詩質而實綺、癯而實腴。自曹劉鮑謝李杜諸人皆莫及也。吾前後和其詩凡百數十篇。至其得意、自謂不甚愧淵明。今將集而并錄之、以遺後之君子。子爲我志之。……

書來りて告げて曰く、「古の詩人に擬古の作有るも、未だ古人に追和する者有らず。古人に追和するは、則ち東坡に始まる。吾は詩人に於いて甚だ好む所無く、獨り淵明の詩を好むのみ。淵明の詩を作ること多からざるも、然るに其の詩質にして實は綺、癯

にして實は腴たり。曹〔植〕・劉〔楨〕・鮑〔照〕・謝〔靈運〕・李〔白〕・杜〔甫〕より諸人皆及ぶこと莫し。吾前後其の詩に和すること凡そ百數十篇なり。其の意を得るに至り、自ら謂ふに甚だしくは淵明に愧ぢず。今將に集めて之に并録し、以て後の君子に遺さんとす。子我が爲に之を志せ……」と。

蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」（『樂城後集』卷二十一）ここで蘇軾が強調するのは、「和陶詩」の特性である。中唐より盛行し始めた「唱和詩」は、和韻という技術的制限の下で、相手への共感や自身の現況、心情を巧みに表現する文人必須の社交術であった。よって、蘇軾以前の唱和詩は、同時代を生きる文人たちの間で交遊を深めるために行われるものであり、遙か昔の古人に對する和韻は殆ど見られなかつた。古人の行跡や詩文を尊崇した際、文人は「擬古詩」を制作した。實際、陶淵明を對象とする擬古詩は、元嘉二十九年（四五二）に鮑照が詠んだ「學陶彭澤體」を嚆矢として諸作ある。しかし、蘇軾は、詩體を模擬することを主眼に置く擬古詩を選択しなかつた。つまり、「和陶詩」は、舊來の「唱和詩」「擬古詩」と異なる性質・形式でありながら、「唱和詩」がもたらす文人間の強い連帶感と「擬古詩」の有する時間の超越性を併せ持つ、新たな文學形態であった。故に、蘇軾は、「古人に追和するは、則ち東坡に始まる」と、その創始者たるを自負し、得意の作品を以て「甚だしくは淵明に愧ぢず」と誇り、それらを編纂した『和陶詩集』を後世に残そうとしたのである。

書簡で言及しているように、蘇軾は紹聖四年（一〇九七）までに「百數十篇」の和陶詩を詠んだ。以後も和作を繼續し、元符三年（一一〇〇）には、現存する『和陶詩集』全四卷の草稿が完成したと思わ

れる。その「和陶詩集」の巻頭を飾ったのは「飲酒二十首」であり、巻末に配されたのは「歸去來兮辭」であった。元符元年（一〇九八）、なお海南島に謫居していた蘇軾は、北歸が叶わない状況下にあっても絶望することなく、「追和淵明歸去來詞。蓋以無何有之鄉爲家。雖在海外、未嘗不歸（淵明の『歸去來詞』に追和す。蓋し無何有の郷を以て家と爲す。海外に在りと雖も、未だ嘗て歸せずんばあらず）」と序し、その心境を次のように詠んだ。

已矣乎

已んぬるかな

吾生有命歸有時

吾が生に命有り 歸するに時有り

我初無行亦無留

我 初めより行く無く 亦た留むる無し

駕言隨子聽所之

駕して言に子に隨ひ 之く所に聽す

豈以師南華

豈に南華を師とするを以て

而廢從安期

安期に従ふを廢せんや

謂湯稼之終枯

謂へらく湯稼の終に枯るるは

遂不溉而不籽

遂に溉がずして籽はざるにあり

師淵明之雅放

淵明の雅放を師とし

和百篇之清詩

百篇の清詩に和す

賦歸來之新引

歸來の新引を賦せば

我其後身蓋無疑

我 其の後身たること蓋し疑ひ無し

蘇軾「和陶歸去來兮辭」（『和陶詩集』卷四）

蘇軾は、我が人生には天命があり、歸隱すべき時機があると詠み、それが海南島に流謫された現在であるとした。蘇軾は、「雅」と「放」の両面を有する陶淵明の處世を模範とし、それが表れた百餘篇もの詩歌に和韻し、ついには「歸去來兮辭」の和篇も詠んだ。蘇軾の師である歐陽脩が「晉無文章、惟陶淵明歸去來兮一篇而已（晉に文章無し、

惟だ陶淵明の「歸去來兮」一篇あるのみ）」と絶賛した。「歸去來兮辭」は、『和陶詩集』の締め括りに相應しい、陶淵明の代表作である。その「歸去來兮辭」の唱和詩の卒章で、蘇軾は己を陶淵明の生まれ変わりとであると宣言したのであった。

建中靖國元年（一一〇二）七月二十八日、蘇軾は享年六十六歳で病歿し、翌崇寧元年（一一〇二）閏六月、蘇轍はその墓誌銘を撰述した。その際、蘇軾の文集として、『東坡集』四十卷、『東坡後集』二十卷、『奏議集』十五卷、『内制集』十卷、『外制集』三卷等を挙げ、更に『和陶詩集』について、「公詩本似李杜、晚喜陶淵明、追和之者幾遍、凡四卷（公の詩本もと李杜に似たり、晩に陶淵明を喜び、之に追和する者幾遍、凡そ四卷なり）」と述べた。蘇軾後半生の詩文集を集めた『東坡後集』二十卷と『和陶詩集』四卷について、南宋の胡仔は「後集乃後人所編、惜乎不載和陶諸詩、大爲闕文也（後集）は乃ち後人の編する所にして、惜しいかな和陶の諸詩を載せず、大いに闕文と爲す」と評したが、蘇軾の墓誌銘によって明らかのように、『東坡後集』は劉沔が編集した文集二十卷を基礎に蘇軾とその末子蘇過（字は叔黨）が増補再編したものであり、『和陶詩集』は『東坡後集』とは別に獨立して編集されたものである。つまり、『東坡後集』に和陶詩が収録されなかったのは、決して「闕文」ではなく、和陶詩を別格に扱った蘇軾の意向に因るものであった。

二、蘇軾生前の蘇轍と和陶詩

『東坡後集』の編纂を支えたのは蘇過であるが、『和陶詩集』の成立に最も寄與したのは蘇轍であった。蘇軾が他人に寄贈した和陶詩九十首のうち、蘇轍に對するものは六十五首であり、百二十四首ある和

陶詩全體の凡そ半数に相當する。その度に蘇軾から同作を求められた蘇轍は、最終的に五十二首の和陶詩を詠んだ。以下、蘇轍和陶詩とその制作時期を列記する（括弧内は『和陶詩集』の巻數）。

- ・元祐七年（一〇九二）八月「繼和陶飲酒二十首」（卷二）
- ・紹聖四年（一〇九七）六月「繼和陶止酒」（卷三）
- ・紹聖四年（一〇九七）十月「繼和陶停雲」（卷四）
- ・紹聖四年（一〇九七）十二月「繼和陶勸農」（卷四）
- ・元符元年（一〇九八）二月六月「繼和陶擬古九首」（卷三）
- ・元符三年（一一〇〇）五月「繼和陶雜詩十一首」（卷三）
- ・建中靖國元年（一一〇一）十月「追和陶歸去來兮辭」（卷四）

蘇轍の和陶詩は、數首の詩からなる連作が多い。「飲酒詩」（二十首、一一一〇字）、「雜詩」（十一首、六九〇字）、「擬古詩」（九首、六〇〇字）、「勸農詩」（六首、一九二字）、「停雲詩」（四首、一二八字）は勿論のこと、紹聖二年（一〇九五）秋に蘇軾が蘇轍に寄せた「讀山海經辭」も十三首の連作であり（蘇軾和陶詩では五六〇字）、「歸去來兮辭」も五章構成の長編である（三三七字）。つまり、蘇軾は、『和陶詩集』の要である大作については兄弟で和韻することを決めていたと見られる。

また、蘇軾が先に詠んで後に蘇轍に繼和を促すという場合が殆どであったが、最晩年の蘇轍に付き従った孫の蘇籀は、『樂城遺言』において次のような祕話を紹介した。

大悲園通閣記公偶爲東坡作、坡云好箇意思、欲別作而卒用。公所著和陶詩擬古九首亦坡代公作。

「大悲園通閣記」は公「蘇轍」偶ま東坡の爲に作るに、坡「好き意思かな」と云ひ、別に作らんと欲して卒に用ふ。公の著す所の

「和陶詩擬古九首」も亦た坡の公に代へて作るなり。

後人はこの解釋に混亂し、兄弟の「和陶擬古九首」を、蘇軾もしくは蘇轍の代作と見なした。しかし、蘇轍が自ら編定した『樂城後集』には、この「繼和陶擬古九首」が収録されており、其五では雷州での流謫生活を描寫されている。よつて、蘇轍の「繼和陶擬古九首」は間違ひなく蘇轍自身の作品である。蘇籀の言の意味するところは、蘇轍の制作後に蘇軾も同題で詠んだ「大悲園通閣記」と同様に、「擬古九首」も、蘇轍が先に詠み、蘇軾が後に「代擬」して詠んだ作品であるということであろう。蘇轍「繼和陶擬古九首」は、『和陶詩集』においては繼和詩とされ、『樂城後集』においては「次韻子瞻和淵明擬古九首」と題されたが、實際にはこのような蘇轍の先行という例外的な制作背景があり、それを蘇籀が公表したものと思われる。

このように、蘇轍は、大作の和陶詩制作に挑み、時には先んじて和陶詩を詠むこともあったが、概して彼の和陶詩からは、蘇軾ほどの熱意を窺うことは出来ない。まず、和陶詩を別に編集した蘇軾とは異なり、蘇轍は、『樂城後集』に自身の和陶詩をほぼ収録した。蘇轍にとって、和陶詩は蘇軾の獨擅場であり、『和陶詩集』の序文で「轍雖馳驟從之、常出其後。其和淵明、轍繼之者亦一二焉（轍馳驟して之〔蘇軾〕に従ふと雖も、常に其の後にし。其の淵明に和するに、轍之に繼ぐ者も亦た一二なり）」と述べるように、蘇軾の詩境には到底及ばないと判断したのである。このことは、蘇轍の和陶詩の内容面からも裏付けられる。

蘇軾から隱遁を求められた最初の和陶詩である「和陶飲酒二十首」の繼和においては、隱遁を望みながらも政治的使命感からそれを逡巡する蘇轍の心情が吐露されており、そのことは、自らの不徳を慙愧し

た「愧」という語が頻出することからも窺える。

*乞身未敢言 身を乞ふること未だ敢へて言はず

常愧外物持 常に外物に持るるを愧づ (其二)

*低回軒冕中 低回す 軒冕の中

此語愧虚傳 此の語虚しく傳はるを愧づ (其二)

*防邊未云失 邊を防ぎて未だ失ふと云はず

憂懷愧安居 憂懷 安居を愧づ (其十)

*回首愧周行 回首して周行に愧づ

羣英粲彪炳 羣英 粲として彪炳たり (其十三)

*永愧陶翁飢 永へに愧づ 陶翁の飢うるに

雖飢心不惑 飢うと雖も心惑はず (其十八)

*功成不歸去 功成りて歸去せず

愧此同心人 此の同心の人に愧づ (其二十)

蘇轍「繼和陶飲酒二十首」(『和陶詩集』卷一)

其一では、外界の事物に煩わされ、致仕を言明せずにいることに、其二では、高官の地位に於いて歸田の計が十年も遅延したことに、其十では、君恩に酬いず、外敵を放り出して安穩と暮らすことに、其十三では、己の能力には不相應な高い官位に列していることに、其十八では、飢えても心惑わない陶淵明に對して、蘇轍は恥じ入った。そして、其二十では、「此の同心の人」に搖れ動く心情を吐露しつつ、「功成りて歸去」しない自分自身を恥じた。結局、門下侍郎として政權の中樞にいた蘇轍は、蘇軾の心情を理解しながらも、行動を同じくし得なかつたのである。

また、紹聖二年(一〇九五)秋に蘇軾から「和陶讀山海經十三首」を贈られた際には「子瞻和陶公讀山海經詩、欲同作。而未成、夢中得

蘇轍による蘇軾「和陶詩」の繼承

數句、覺而補之(子瞻陶公の「山海經を讀む詩」に和し、同作せんと欲す。而るに未だ成らずして、夢中に數句を得、覺めて之を補ふ)と題する詩を詠んだものの、その和作を完成できなかった。「歸去來兮辭」もまた、蘇軾の生前に和韻できなかったという。

昔予謫居海康、子瞻自海南以和淵明歸去來之篇、要予同作。時予方再遷龍川、未暇也。辛巳歲、予既還潁川、子瞻渡海浮江、至淮南而病、遂沒於晉陵。是歲十月、理家中舊書、復得此篇、乃泣而和之。蓋淵明之放與子瞻之辯、予皆莫及也。示不逆其遺意焉耳。昔予海康に謫居せしとき、子瞻海南より「淵明の歸去來に和す」の篇を以て、予に同作を要む。時に予方に龍川に再遷せられ、未だ暇あらず。辛巳歲(一一〇二)、予既に潁川に還るに、子瞻渡海浮江して、淮南に至りて病み、遂に晉陵に沒す。是の歲十月、家中の舊書を理め、復た此の篇を得て、乃ち泣して之に和す。蓋し淵明の放と子瞻の辯とは、予皆及ぶこと莫し。其の遺意に逆らざるを示すのみ。

蘇轍「追和陶歸去來兮辭引」(『和陶詩集』卷四)
蘇軾が蘇轍に「和陶歸去來兮辭」を贈ったのは元符元年(一一〇九八)六月であり、その三年後の建中靖國元年(一一一一)七月末に蘇軾は病歿した。蘇軾の死の約三箇月後に蘇轍が「復た此の篇を得て、乃ち泣して之に和す」と述懐する背景には、蘇軾の期待に應えることが出来なかつた悔恨が窺える。

このような蘇轍の和陶詩に對する消極的とも言える姿勢には、彼の陶淵明觀が影響している。蘇轍は、「和陶詩集」の序文に蘇軾書簡を引用した後、次のように總括した。

嗟夫、淵明不肯爲五斗米一束帶見鄉里小人。而子瞻出仕三十餘

年、爲獄吏所折困、終不能復、以陷於大難、乃欲以桑榆之末景自託於淵明、其誰肯信之。雖然、子瞻之仕其出入進退、猶可考也。後之君子其必有以處之矣。

嗟夫、淵明は五斗米の爲に一たび束帶して郷里の小人に見ゆるを肯ぜず。而るに子瞻は出仕すること三十餘年、獄吏の折困する所と爲るも、終に憐むる能はず、以て大難に陥るに、乃ち桑榆の末景を以て自ら淵明に託せんと欲するは、其れ誰か肯へて之を信ぜん。然りと雖も、子瞻の仕其の出入進退は、猶ほ考ふべきなり。後の君子は其れ必ず以て之に處すること有らん。

蘇轍は、處世法を異とした蘇軾が陶淵明に倣うことに異論が出るであろうと指摘しつつ、後世にはこの蘇軾の處世を參考とする者が出現すると述べて辯護した。しかし、南宋の費袞によれば、ここは蘇軾に命じられて改訂した箇所であり、蘇轍に隨行した末子蘇遜が傳えた元々の草稿には、次のように記されていたという。²³⁾

嗟夫、淵明隱居以求志、詠歌以忘老。誠古之達者、而才實拙。若夫子瞻、仕至從官、出長八州、事業見於當世。其剛信矣、而豈淵明之拙者哉。

嗟夫、淵明は隱居して以て志を求め、詠歌して以て老を忘る。誠に古の達する者なれども、才は實に拙し。夫の子瞻の若きは、仕へては從官に至り、出でては八州に長たり、事業は當世に見る。其の剛なること信にして、而して豈に淵明のごとき拙なる者ならんや。

費袞「東坡改和陶集引」(『梁溪漫志』卷四)

蘇轍は、陶淵明が自らを「性剛才拙」と評したことを踏まえ、陶淵明と蘇軾の兩者が「性剛」である點は共通するものの、翰林侍讀學士兼

端明殿學士の肩書きを以て禮部尙書の地位にまで昇り、外任しては八度も知州となった蘇軾は、畢竟陶淵明のような「才拙」な者ではなかつたと述べた。陶淵明・蘇軾兩者の處世の相違を述べながら、隱遁を標榜する同志であると評するところは改訂稿と共通するが、草稿では、蘇軾の官歴を特記し、陶淵明の才覺と比較をしようとした行っている。つまり、蘇轍は、陶淵明の詩文を李白・杜甫よりも上位としたが、政治的功績を遺せなかつた處世については評價しなかつたのである。しかし、蘇軾は、剛直な性格に根ざした激烈な政治的野心とそれを自省して早々に隱遁した潔い處世という陶淵明の二面性こそを高く評價した。それは蘇軾が陶淵明の詩文を「質にして實は綺、瘴にして實は腴たり」と評したことからも明らかである。故に、蘇軾は蘇轍に草稿の修正を命じたのであろう。

このように、蘇軾から「和陶飲酒二十首」を始めとする多くの和陶詩を寄贈され、更に大作の繼和や『和陶詩集』序文の制作を依頼された蘇轍は、和陶詩の共同制作者としての役割を期待されていたと言える。しかし、彼は、蘇軾ほどの陶淵明に對する強い共感を持つに至らず、その期待に完全に添うことが出来なかつたのである。

三、蘇軾歿後の蘇轍と和陶詩

蘇軾の和陶詩に對する情熱を知悉していた蘇轍は、蘇軾歿後にその期待に半ば背いたことを後悔したらしい。それが表れたのが、蘇轍の「追和陶歸去來兮辭」である。

歸去來兮

歸りなんいざ

歸自南荒又安歸

南荒より歸るに 又た安くにか歸らん

鴻乘時而往來

鴻は時に乘じて往來するに

曾奚喜而奚悲 曾て奚ぞ喜び奚ぞ悲しまん

蘇轍は、潁昌府（河南省許昌市）において致仕した際、共に歸隱せんとして屋敷の西側に蘇軾のための居室を造營したが、その希望は當時の政治情勢から叶わず、更には、蘇軾に先立たれてしまふ。故に、蘇轍は、過去の南遷の悲しみも北歸の喜びも無に歸し、ただ深い喪失感を持つに至つたのである。蘇轍は、蘇軾歿後の自分自身を次のように比喩した。

歸去來兮

歸りなんいざ

世無斯人誰與遊

世に斯の人無くして誰と與にか遊ばん

龜自閉於牀下

龜のごとく自ら牀下に閉ざし

息眇縣乎無求

息眇縣乎として求むること無し

このように、蘇轍は、「龜」のように閉門して人と交流せず、俗世における榮達も隱遁による閑適も何も求めないという状況であつた。蘇轍がひたすら求めたのは、蘇軾と隱遁して遊ぶ夢であつた。そして、この辭賦は、次のように結ばれる。

已矣乎

已ぬるか

斯人不巧惟知時

斯の人巧みならずして 惟だ時を知る

時不我知誰爲留

時 我を知らずして 誰か爲に留めん

歲云往矣今何之

歲 云に往くに 今何くにか之かん

…(中略)…

視白首之章韞

白首の章韞を視て

信稚子之書詩

稚子の書詩を信ず

若妍醜之已然

妍醜の已に然るが若きは

豈復臨鏡而自疑

豈に復た鏡に臨みて自ら疑はんや

即ち、蘇轍は、蘇軾を失つたために、時流を留める術もその行き先も

判らずに苦惱していた。しかし、蘇軾の晩年の「章韞（印章と官服）」を整理しながら、蘇軾から託せられた遺児が素晴らしい「書詩」を残すことを確信したという。そして、同様に蘇軾に先立たれた自分を見つめ直し、その長所・短所が最早變わりようのないことを実感する。蘇軾の不變なる所とは、才及ばずとも常に蘇軾に従い、その希望に添おうと努めるところであつた。「其の遺意に逆らはずるを示すのみ」と序したように、蘇轍は、蘇軾の遺志を繼ぐことで、和陶詩を巡る心残りを拂拭せんとしたのである。

既述したように、蘇軾は、和陶詩を以て陶淵明を模範とした自らの處世を現實の同志に示そうと考えていた。蘇軾が『和陶詩集』の序文に引用した書簡において、蘇軾は、陶淵明の處世について次のように言及している。

然吾於淵明豈獨好其詩也哉。如其爲人、實有感焉。淵明臨終疏告儂等、吾少而窮苦、每以家貧、東西遊走。性剛才拙、與物多忤。自量爲己必貽俗患、眼勉辭世、使汝等幼而飢寒。淵明此語蓋實錄也。吾今真有此病、而不蚤自知、半生出仕、以犯世患。此所以深服淵明、欲以晚節師範其萬一也。

然るに吾 淵明に於いて豈に獨り其の詩を好むのみならんや。其の人と爲りの如きは、實に感有り。淵明 臨終に疏して儂等に告ぐ、「吾 少くして窮苦し、毎に家貧なるを以て、東西に遊走す。性剛才拙にして、物と忤ふこと多し。自ら量るに己の必ず俗患を貽すと爲し、眼勉めて世を辭し、汝等をして幼くして飢寒せしむ」と。淵明の此の語は蓋し實錄なり。吾 今真に此の病有るも、蚤に自ら知らず、半生出仕して、以て世患を犯す。此れ深く淵明に服する所以にして、晚節を以て其の萬一を師範とせんと欲す。

ここで蘇軾が擧げたのは、陶淵明が五人の息子——儼・俛・份・佚・佟に與えた疏文「與子儼等疏」の一節である。陶淵明にとつて、この疏文の主旨は、「然汝等雖不同生、當思四海皆兄弟之義（然るに汝等同生ならずと雖も、當に四海皆兄弟の義を思ふべし）」と述べるように、自らの處世を示して苦境下における息子達の連攜を祈念することにあつた。そして、これを引用した蘇軾も、嶺南における自身の處世を示すことで苦境に直面する門下を慰撫しようと考えたのではないだらうか。しかし、北歸後聞もなく發病して歿した蘇軾には、それを遂行することは出来なかつた。そのため、蘇轍が、蘇軾の遺志を實現しようと考えたのである。

蘇軾歿後の和陶詩について、蘇門の門人であり、晁補之の族弟である晁説之（字は以道）は、次のように述べている。

足下愛淵明所賦歸去來辭、遂同東坡先生和之、是則僕之所未喻也。建中靖國間、東坡和歸去來初至京師、其門下賓客又從而和之者數人、皆自謂得意也。陶淵明紛然一日滿人目前矣。參寥忽以所和篇視予、率同賦、予謝之。

足下は淵明の賦する所の「歸去來の辭」を愛し、遂に東坡先生とともに之に和するに、是れ則ち僕の未だ喻らざる所なり。建中靖國の間、東坡の「歸去來に和す」は初めて京師に至り、其の門下賓客も又た從ひて之に和する者數人、皆自ら意を得たりと謂ふ。陶淵明 紛然として一日に人目の前に滿つ。參寥 忽ち和する所の篇を以て予に視し、率ひて同に賦せしめんとするも、予之を謝る。

晁説之「答李持國先輩書」（『崇山文集』卷十五）

即ち、蘇軾の歿年である建中靖國元年（一一〇一）以降、蘇軾の「和陶歸去來兮辭」が國都開封に傳わり、釋道潛を含む蘇門の門下賓客の

數人が、蘇軾の「和陶歸去來兮辭」に繼和したという。そして、晁説之には快く思われていなかったらしいこの風潮は、蘇轍の發起に因るものであつたと考えられる。というのも、同じく門人である李之儀（字は端叔）が、次のように回想しているからである。

予在穎昌、一日從容、黃門公遂出東坡所和。不獨見知爲幸、而於其卒章始載其後身盡和。平日談笑、聞所及、公又曰、家兄近寄此作、令約諸君同賦、而南方已與魯直・少游相期矣。二君之作未到也。居數日、黃門公出其所賦、而輒與牽強。後又得少游者、而魯直作與不作未可知、竟未見也。張文潛・晁无咎・李方叔亦相繼而作、三人者雖未及見、其賦之則久矣、異日當盡見之。

予 穎昌に在りしとき、一日從容たり、黃門公（蘇轍）遂に東坡の和する所を出す。獨り見知して幸ひと爲すのみならず、而も其の卒章に於いて始めて「其の後身にして盡く和せり」と載す。平日談笑して、聞ま及ぶ所あり、公又た曰く、「家兄 近く此の作を寄せ、諸君をして同に賦するを約せしめんとし、南方にて已に魯直・少游と相期せり。二君の作 未だ到らず」と。居ること數日、黃門公 其の賦する所を出し、輒ち與に牽強す。後に又た少游の者を得るも、魯直の作るか作らざるかは未だ知るべからずして、竟に未だ見ず。張文潛・晁无咎・李方叔も亦た相繼ぎて作り、三人の者は未だ見るに及ばずと雖も、其の之を賦すこと則ち久し、異日當に盡く之を見るべし。

李之儀「跋東坡諸公追和淵明歸去來引後」（『姑溪居士後集』卷十五）

李之儀は、穎昌府において蘇轍から蘇軾の「和陶歸去來兮辭」を見せてもらふ機會を得たという。その後、蘇軾は、生前の蘇軾が「諸君をして同に賦するを約せしめん」とし、先ず黃庭堅（字は魯直）と秦觀

(字は少遊)に「歸去來兮辭」の和韻を求めたという経緯を語ったのであった。李之儀が穎昌府にいた時期は、提舉河東常平であった元符三年(一一〇〇)から崇寧元年(一一〇二)七月までであるため、彼が蘇轍と面會した時期は、蘇轍が「歸去來兮辭」に追和した建中靖國元年(一一〇二)十月から崇寧元年(一一〇二)七月までの間に限定できる。これは、穎昌府の北隣に位置する開封に蘇軾の「和陶歸去來兮辭」が廣まった時期にも重なるのである。

更に、李之儀が「黃門公其の賦する所を出し」と述べているように、蘇轍は、門人に追和を求めるときに、蘇軾の和陶詩とともに自身の和陶詩も提示した。張耒の「歸去來兮辭」の追和詩にも、「子由先生示東坡公所和陶靖節歸去來詞及侍郎先生之作、命之同賦(子由先生東坡公の和する所の陶靖節の『歸去來詞』及び侍郎先生の作を示し、之に命じて同に賦せしむ)」という自注が付されており、ここに云う侍郎先生とは門下侍郎であった蘇轍を指すと考えられる。蘇軾の「和陶歸去來兮辭」は、瘴癘の地である海南島で陶淵明の如き隱遁を果たした自分を陶淵明の「後身」であると誇った作であり、蘇轍の「追和陶歸去來兮辭」は、蘇軾の急逝を歎きながら、その遺志を繼承することを暗示した作である。この二首の和陶詩によって、多くの門人は、「陶淵明→蘇軾」の後を繼ぐことを世に明らかにするには、「歸去來兮辭」の追和が最適であると考えるに至ったのであろう。このように、蘇軾歿後の蘇轍は、蘇軾の「歸去來兮辭」の和詩とともに、己の悲哀と悔恨を詠った追和詩も示しつつ、門下に和陶詩の繼承を促したのである。

四. 蘇門の和陶詩と後世への影響

蘇轍は、元符三年(一一〇〇)に大赦によって北歸を果たしてから、政和二年(一一二二)十月三日に享年七十四歳で歿するまでの約十二年間、經書の注釋や別集の編纂をしつつ、親族や門人を相手に、和陶詩の、特に「歸去來兮辭」の繼承を働きかけていた。蘇轍から和作の経緯を聞いた李之儀は、崇寧元年(一一〇二)に「歸去來兮辭」に追和し、張耒・晁補之・李廌(字は方叔)も追従したという。以下、現存する蘇門の和陶詩を挙げる。

・秦觀「和淵明歸去來辭」〔淮海集〕卷一)

・晁補之「追和陶淵明歸去來辭」〔雞肋集〕卷三)

・張耒「和歸去來詞」〔柯山集〕卷五)

・李之儀「次韻子瞻追和歸去來」〔姑溪居士後集〕卷十三)

・蘇過「次陶淵明正月五日游斜川韻」〔斜川集〕卷一)

・蘇軾「次陶淵明正月五日游斜川韻」〔斜川集〕卷一)

・蘇軾「次陶淵明正月五日游斜川韻」〔斜川集〕卷一)

・蘇軾「次陶淵明正月五日游斜川韻」〔斜川集〕卷一)

このように、彼らの和陶詩の多くは「飲酒二十首」と「歸去來兮辭」を對象としたものであり、蘇過を除いた四人が「歸去來兮辭」に追和した。また、作品は現存しないものの、前掲の晁説之の書簡及び李之儀の跋文の内容から、崇寧元年(一一〇二)に穎昌府の蘇轍のもとに弔問に訪れた釋道潛と、蘇轍と同時期に穎昌府に居住していた李廌も、「歸去來兮辭」に追和したことが判る。元符三年(一一〇〇)六月下旬に雷州にて蘇軾から直接和韻を求められた秦觀以外は、穎昌府を據

點に和陶詩の繼承を促した蘇轍の要請に因ると考えて良いであろう。この穎昌府は舊法黨人ゆかりの地であり、蘇轍の隱棲後はその縁故が強化された。

許洛兩都軒裳之盛、士大夫之淵藪也。黨論之興、指爲許洛兩黨。崔鷗德符・陳恬叔易皆戊戌生、田晝承君・李鷹方叔皆己亥生、竝居穎昌陽翟、時號戊己四先生、以爲許黨之魁也。故諸公坐廢之久。許洛の兩都は軒裳の盛、士大夫の淵藪なり。黨論の興るに、指して許洛の兩黨と爲す。崔鷗德符・陳恬叔易は皆戊戌（一〇五八）の生、田晝承君・李鷹方叔は皆己亥（一〇五九）の生にして、竝びに穎昌の陽翟に居り、時に戊己の四先生と號して、以て許黨の魁と爲す。故に諸公坐して廢せらるること久し。

張邦基「戊己四先生」（『墨莊漫錄』卷四）
 穎昌府（原名は許州）は、失意の舊法黨人が結集した地として、洛陽と併稱されていた。蘇軾・蘇轍兄弟の政界における後見人であり、姻戚關係も結んだ蜀の名士范鎮の一族も穎昌府に居を構えており、蘇轍が終の住處として穎昌府を選択したのは、この范氏一族の影響もあったと見られる。清の王士禛は、「蜀洛之黨亦曰許洛。蓋以穎濱晚居許田（蜀洛の黨は亦た許洛と曰ふ。蓋し穎濱〔蘇轍〕の許田に晩居するを以てす）」と述べ、元祐年間（一〇八六—一〇九三）に舊法黨内で抗争した「蜀黨」と「洛黨」の延長上に「許洛の兩黨」があり、徽宗朝初期における許黨の形成が、蜀黨の有力者であった蘇轍の影響に因るものであると指摘した。時人は、その「許黨の魁」たる崔鷗（字は德符）・陳恬（字は叔易）・田晝（字は承君）・李鷹をして「戊己の四先生」と總稱した。このうち、李鷹・陳恬には蘇轍との詩文交流が確認できることから、蘇轍が後援したと見られる「許黨」には、新たな

門人の育成という側面があったと考えられる。そして、蘇轍は、「蘇門」に「歸去來兮辭」の追和を勧め、和陶詩の繼承を促したが、この「許黨」に對しても同様であったらしい。「栗里譜」という陶淵明年譜を制作した南宋の王質は、「歸去來兮辭」に和韻した際、次のような小序を付した。

元祐諸公多追和柴桑之辭。自蘇子瞻發端、子由繼之、張文潛・秦少游・晁无咎・李端叔又繼之、崇寧崔德符、建炎韓子蒼又繼之。元祐の諸公は多く柴桑の辭に追和す。蘇子瞻より端を發し、子由は之に繼ぎ、張文潛・秦少游・晁无咎・李端叔も又た之に繼ぎ、崇寧の崔德符、建炎の韓子蒼も又た之に繼ぐ。

王質「和陶淵明歸去來辭序」（『雪山集』卷十一）
 このように、蘇軾・蘇轍や舊來の蘇門の門人に續いて、許黨の「戊己の四先生」の一角である崔鷗が崇寧年間（一一〇二—一一〇六）に「歸去來兮辭」に和韻し、更に、蘇轍晩年の弟子である韓駒（字は子蒼）も、蘇轍の歿後ではあるが、南宋初頭の建炎年間（一一二七—一一三〇）に至って繼和したという（現存せず）。蘇轍が彼らに直接促したとは明言できないが、彼らの繼和が蘇轍の影響を受けて行われたことは疑い得ないであろう。

ところで、蘇轍が特に「歸去來兮辭」を選択してその和作を奨励し、門人もそれに應じたのは一體何故だったのか。前述した生前の蘇軾の意圖や蘇轍の配慮によって、門人が蘇軾の衣鉢を繼承しようとしたことも一因であるが、北宋末の政治状況にも要因を求められよう。崇寧元年（一一〇二）以降、「蘇門」の多くは、所謂「元祐黨禁」によって、僻遠の地に貶謫されたり、免職や致仕に追い込まれたりしていた。「許黨」の面々も、「坐して廢せらるること久し」と、穎昌府

に逼塞していた。このように中央政界から放逐された人々にとつて「五斗米の爲に一たび束帯して郷里の小人に見ゆるを肯ぜず」に隱遁した陶淵明と、その陶淵明に倣つて「海外に在りと雖も、未だ嘗て歸せずんばならず」と宣言した蘇軾が詠んだ「歸去來兮辭」に繼和することは、その強靱かつ自由な人生觀を共有し、政治的不遇による苦しみから自分自身を解放することに繋がつたのであろう。實際に、「歸去來兮辭」の追和の際、張耒は「耒軾自憫其仕之不偶、又以甲東坡先生之亡、終有以自廣也（耒は軾自ら其の仕の不偶なるを憫ひ、又た東坡先生の亡を弔ふを以て、終に以て自ら廣むること有り）」と自注し、晁補之も「非擬其辭也、繼其志也（其の辭を擬ふに非ず、其の志を繼ぐなり）」と序した。その意識は、後世の和陶詩人にも共通するものであり、蘇軾は、「歸去來兮辭」を代表とする蘇軾の和陶詩の求心力によつて、蘇軾歿後の蘇門を統率せんとしたのである。

更に、後の南宋においても、和陶詩を詠む者が出現した。これには、蘇軾が潁昌府において指導した門人の影響も考慮に入れる必要がある。李之儀の遺文を編纂した吳芾は、多くの和陶詩を詠んでそれを『和陶詩』全三卷にまとめ、崔鷗に詩を學んだ陳與義は、「諸公和淵明止酒詩、因同賦（諸公淵明の『止酒詩』に和するに、因りて同に賦す）」という詩題が示すように、友人と「止酒詩」に和韻した。また、それ以外にも、「歸去來兮辭」に限ると、前述の王質に加えて、釋惠洪、李綱、周紫芝、王十朋、方岳、喻良能、楊萬里、柴望、家鉉翁が、金では趙秉文が詠んだ。結果として、これらの諸文人を含め、陳造、陳起、朱熹、趙蕃、張栻、張鎡、劉敞、舒岳祥、于石も和陶詩を詠み、更に、宋代以降も和陶詩人が續出した。その立場は、隱者、謫臣から高官や皇帝に至るまで様々であるが、歴代の文人が競つて和陶

詩を詠み繼いだのである。そして、このように和陶詩制作が盛行した基因は、先ず蘇門の門人が先師蘇軾を偲んで和陶詩に追和したことであつたと言えよう。

結語

平素から陶淵明の如き隱遁を切望していた蘇軾は、嶺南流謫によつて陶淵明への共感が深化し、全陶淵明詩に和韻して己の處世と心情を表明することを決意した。蘇軾は、舊來の唱和詩・擬古詩とは性質を異とする「和陶詩」を創始したことを誇り、遂に「歸去來兮辭」の和韻を以て自らを陶淵明の「後身」であると宣言した。更に、蘇軾は、和陶詩を媒介とする連帶感が、現實の同志である蘇門の門人の間に浸透し、「後の君子」に繼承されることを望んだのである。

その遺志を受け繼いだのが實弟蘇轍であつた。蘇軾は、和陶詩の共同制作者たることを蘇軾から囑望されていた。蘇軾の歿後、その役目を十分に果たせなかつたことを後悔した蘇轍は、改めて積極的に蘇門における和陶詩の繼承に乗り出したのである。そして、「元祐黨禁」による肅正が開始されようとする時期にあつて、門下に和陶詩の、特に「歸去來兮辭」の追和を促した。この時の門下の繼承姿勢は一樣ではなかつたが、晩年に陶淵明に因んだ號を名乗つて隱棲した晁補之（號は歸來子）や蘇過（號は斜川居士）のように、蘇軾の後進とならんとする門人も多數存在した。また、致仕後の蘇軾が據點とした潁昌府には、元祐黨人とその子弟が多く隱棲しており、舊來の門人以外に、蘇軾が新たに門下とした者や、間接的にその影響を受けた者があり、「許黨」と總稱された。その新たな門人も「歸去來兮辭」に追和し、政治的不遇による閉塞感や悲哀から自身を解放したのである。こ

れによつて多くの和陶詩人が出現し、中國文學史における新たな唱和詩賦の系譜が形成されることになった。奇しくも蘇轍が『和陶詩集』の序文にて述べた「後の君子は其れ必ず以て之に處すること有らん」という豫言が的中したのであり、それには蘇轍の盡力に負うところが大きかつたのである。

注

(1) 本稿に引用する陶淵明原詩、及び蘇軾・蘇轍の和陶詩は南宋黃州刊本である臺灣國立中央圖書館所藏『東坡先生和陶淵明詩』（中國書店、二〇〇八年、本稿では『和陶詩集』と略）を底本とするが、適宜各單行の諸本を参照した。

(2) 蘇軾は、「予飲酒終日、不過五合、天下之不能飲、無在予下者。然喜人飲酒、見客舉盃徐引、則予胸中爲之浩浩焉落落焉、乃過於客。閑居未嘗一日無客、客至未嘗不置酒。天下之好飲、亦無在予上者」（『書東皋子傳後』、中華書局刊『蘇軾文集』卷六十六）と述べるように、下戸であつたが、客人との酒宴を好んだ。

(3) 小川環樹「蘇東坡の一生とその詩」（『蘇軾』上、岩波書店、一九六二年）に、「これ〔和陶詩〕はかれ〔蘇軾〕の淵明の文學への深い愛好と傾倒を示すものであるが、かれ自身の和作だけを讀んでも、黃州のころに比べてさらに澄明な心情が感ぜられる」とある。

(4) 和陶詩研究には、①合山究「蘇軾の和陶詩（上）——陶淵明との繋がりについて——」（『中國文藝座談會ノート』第十五號、九州大學中國文學會、一九六五年）、②横山伊勢雄「宋代文人の詩と詩論」所收「蘇軾の『和陶詩』について」（創文社、二〇〇九年）、③今場正美「隱逸と

文學——陶淵明と沈約を中心として——」所收「揚州における蘇軾の『和陶詩』」（『惠州における蘇軾の『和陶詩』」「海南島における蘇軾の『和陶詩』」（中國藝文研究會、二〇〇三年）、④内山精也「蘇軾詩研究——宋代士大夫詩人の構造」所收「蘇軾次韻詩考」「蘇軾次韻詞考——詩詞間に見られる次韻の異同を中心として——」「蘇軾體括詞考——陶淵明『歸去來の辭』の改編をめぐる——」（研文出版、二〇一〇年）、⑤末廣敏久「蘇軾の和陶詩について」（『中國學研究論集』第二號、廣島中國文學會、一九九八年）、⑥劉尙榮「宋刊『東坡和陶詩』略說」（『文史』第十五輯、中華書局、一九八二年）、⑦袁行霽「陶淵明研究」所收「論和陶詩及其文化意蘊」（北京大學出版社、二〇〇九年）等があり、③に蘇軾・蘇轍の和陶詩交流の論述が、⑦に蘇軾前後の擬陶詩・和陶詩への簡潔な論及がある。

(5) 元祐七年（一〇九二）、蘇軾は正月に知揚州に敘任せられたが、九月に召還されて兵部尙書に、十一月に禮部尙書に昇つた。同年六月、蘇軾は尙書右丞から門下侍郎に昇進した。

(6) 陶淵明の原詩では、「問君何能爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然見南山」と、隱遁を樂しむ様が詠まれた。同元祐七年（一〇九二）、蘇軾は「見」字を是とするなど（『蘇軾文集』卷六十七「題淵明飲酒詩後」）、この詩に強い關心を示した。

(7) 蘇轍「逍遙堂會宿二首并引」（『樂城集』卷七）の序文に「既壯將遊宦四方、讀韋蘇州詩至『安知風雨夜、復此對床眠』、惻然感之、乃相約早退爲閑居之樂」とある。

(8) 蘇軾「和陶歸園田居六首」は『和陶詩集』卷一所收。序文に「三月四日……歸卧既覺、聞兒子過誦淵明『歸園田居詩六首』、乃悉次其韻。……今書以奇妙總大士參寥子」とある。

- (9) 蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」は『和陶詩集』に未収録であるため、『樂城後集』より引いた。
- (10) 『鮑氏集』卷四。
- (11) 『全唐詩』卷六七一に晩唐の唐彥謙の作として「和陶淵明貧士詩七首」を収録するが、王兆鵬「唐彥謙四十首賡詩證僞」(『中華文史論叢』第五十二輯、上海古籍出版社、一九九三年)によって、これは元の戴表元の作であると立證された。
- (12) 内山精也氏の統計(注(4)④「蘇軾次韻詩考」)では、蘇軾は嶺外時代(紹聖元年(一〇九四)十月～紹聖四年(一〇九七)六月)に五十八首、海外時代(紹聖四年(一〇九七)六月～元符三年(一一〇〇))に四十六首の和陶詩を詠んだ。また、陶淵明詩のうち「榮木」「贈長沙公」「酬丁柴桑」「命子」「歸鳥」「諸人共遊周家墓柏下」「悲從弟仲德」「庚子歲五月中從都還阻風於規林二首」「癸卯歲十二月中作與從弟敬遠」「戊申歲六月中遇火」「述酒」「賁子」「有會而作」「蜡日」「擬挽歌辭三首」「聯句」に、蘇軾は和韻していない。蘇軾晩年の文集が當時の政情故に出版には至らず、草稿であった可能性が高いことは、拙稿「蘇軾文集の編纂と蘇過」(『中國文學論集』第三十七號、九州大學中國文學會、二〇〇八年)で論じた。
- (13) この「歸」字は、「生」との句中對によって「死」の意味も含んでおり、「生死」が定まった有限の人生において、時機を逸せずに「歸隱」することの重要性を詠った妙句である。
- (14) 歐陽脩の評語は、蘇軾「跋退之送李愿序」(『蘇軾文集』卷六十六)に見える。
- (15) 蘇轍「亡兄子瞻端明墓誌銘」(『樂城後集』卷二十二)。
- (16) 胡仔「茗溪漁隱叢話後集」卷二十八。
- (17) 蘇籀『樂城遺言』は、『全宋筆記』第三編七冊(大象出版社、二〇〇八年)収録のものを底本とする。
- (18) 周必大「蘇文定公遺言後序」(『文忠集』卷五十二)に「至『和陶擬古九首』則明言坡代作、識者當自得之」とある。明の焦竑は「至『和陶擬古九首』『大悲圓通閣記』本子由作、見『樂城遺言』と述べるが(『澹園續集』卷一「刻蘇長公外集序」、これは原文を「代坡公作」と解したためであろう)。
- (19) 『樂城後集』卷二に所收、其五に「海康雜蟹蟻、禮俗久未完。我居近閩閩、願先化衣冠」と詠まれている。但し、蘇轍「繼和陶雜詩十一首」は『樂城後集』に未収録である。『樂城集』(五十卷、元祐六年(一〇九一)編纂)・『樂城後集』(二十四卷、崇寧四年(一一〇五)編纂)・『樂城三集』(十卷、政和元年(一一一一)編纂)が蘇轍の自編であることは、蘇轍が『樂城後集引』『樂城第三集引』で明言している。
- (20) 『樂城後集』卷一。
- (21) 費袞「東坡改和陶集引」では、更に「此文今人皆以爲穎濱(蘇轍)所作、而不知東坡有所筆削也。宣和間、六槐堂蔡康祖、得此稿於穎濱第三子(蘇遜)、因錄以示人、始有知者」と後述している。
- (22) 陶淵明「雜詩十二首」其五(『陶淵明集』卷四)に「憶我少壯時、無樂自欣豫。猛志逸四海、騫翮思遠翥」とある。蘇軾は陶淵明の「猛志」をその詩文から感得したのであろう。
- (23) 致仕後の蘇轍は親族や門人とは交遊したが、概ね杜門謝客した。「遺老齋絕句十二首」(『樂城三集』卷二)の其十に「避事已謝客、養性不看書」と詠むように、政治的配慮のためであろう。
- (24) 『樂城遺言』に、「公曰『六郎作詩髣髴追前人、畫墨竹過李康年遠矣』」とあり、この「六郎」は蘇過を指す。

- (25) 『陶淵明集』 卷七。
- (26) ここに云う「於其卒章始載其後身盡和」において、「其卒章」は蘇軾「和陶歸去來兮辭」の卒章を指し、「其後身盡和」はそこで詠まれた「師淵明之雅放、和百篇之清詩。賦歸來之新引、我其後身盡無疑」を概説したものである。
- (27) 崇寧元年（一一〇二）七月、李之儀は御史臺に投獄された。『宋史』卷三四四「李之儀傳」に「徽宗初、提舉河東常平、坐爲『范純仁遺表』作行狀、編管太平、遂居姑熟」とある。
- (28) 蘇轍「天竺海月法師塔碑」（『樂城後集』卷二十四）に、「又十三年崇寧元年（一一〇二）、子與子瞻皆自嶺外得歸、而子瞻終於昆陵、餘杭參寥師弔子穎川」とある。また、蘇轍は「李方叔新宅」（『樂城三集』卷一）を李廌に贈り、「李方叔文似唐蕭李」と評した（『樂城遺言』）。
- (29) 蘇過は范鎮の孫女を娶った。孔凡禮『蘇轍年譜』五八八頁（學苑出版社、二〇〇一年）に「墓誌銘」亦謂鎮晚家居許。於此知蘇轍謀居與定居、與范氏有聯繫」とある。
- (30) 王士禛『香祖筆記』卷十一。蘇轍と許黨についての考察は、朱剛「天は思うところがあり蘇轍を一人この世に残した—蘇轍晩年の事跡考辨」（廣澤裕介譯、『未名』第二十二號、中文研究會、二〇〇四年）に詳しい。
- (31) 李廌は元より蘇門に屬し、注（28）に擧げるように、穎昌府において蘇轍と交流した。また、『樂城遺言』に蘇轍の評として「陳恬『題襄城北極觀鐵脚道人詩』、詩似退之」とある。
- (32) 崇寧五年（一一〇六）、蘇轍は「題韓駒秀才詩卷一絕」（『樂城後集』卷四）を詠んだ。また、『宋史』卷四四五「韓駒傳」に「尋坐爲蘇氏學、謫監華州蒲城縣市易務」とある。
- (33) 吳芾「和陶詩」は現存しないが、『湖山集』卷一に和陶詩が収録され

ている。彼が李之儀の遺文を編纂したことは、吳芾「姑溪居士前集序」（『姑溪居士前集』卷首）を参照。陳與義（字は去非）が崔鶻に師事したことは、徐度「却掃篇」卷中に「陳參政去非少學詩於崔鶻德符、嘗請問作詩之要」とあることから判る。陳與義詩は『簡齋集』卷二所收。